

## 企画展「煌びやかなお嫁入りー信濃の大名道具ー」より 近世大名婚礼調度とその技法、製作者について



図1：黒棚（真田宝物館蔵）身の回りの化粧道具などを飾ったもの

長野市立博物館では、9月23日（金・祝）から11月20日（日）まで、秋の企画展「煌びやかなお嫁入りー信濃の大名道具ー」展を開催します。

本展は、信濃にかつて存在した大名家の中で、松代藩真田家、上田藩松平家、松本藩小笠原家・戸田家、高島藩諏訪家、高遠藩内藤家、飯田藩堀家に伝わった婚礼調度に焦点をあてた展覧会です。

長野市はかつて松代藩真田家が治めた土地であり、真田家伝来の大名婚礼調度が多数伝来しています（図1）。これらについては研究が進められ、大名の煌びやかな婚礼の様子を伝える資料として、現在も輝きを放っています。

企画展を開催するにあたって長野県内各地に伝わる大名婚礼調度を調査した結果、松本藩戸田家に伝わった婚礼調度群がこれまで展示される機会が少なかったこと、また資料調査がされていなかったことから、今回の企画展でご紹介させていただくことになりました。

本稿では企画展の調査結果に基づき、松本藩主・戸田家伝来の婚礼調度群の特色や技法、製作者についてご紹介します。

## 第1章

### 松本藩主・戸田家伝来の大名道具

松本市には、かつて当地の藩主であった戸田家伝来の大名道具がまとまって現存しており、その中に、「茶弁当」を中心とした婚礼調度（個人蔵・松本市教育委員会寄託）があります（図2）。

これらは徳島藩主・蜂須賀家から嫁いだ姫君によってもたらされました。該当する女性として、享和元年（1801）に嫁いだ寿美姫と、天保元年（1830）に嫁いだ光姫という2人の女性があげられます。他に関係する調度として、女乗物（松本市蔵）も現存しており、長野県内に伝わる大名婚礼調度は数が少なく、貴重なものです。同じく蜂須賀家から戸田家に伝わったものと

して、「桐紋唐草蒔絵雑道具」（東京・三井記念美術館蔵）が知られています。

#### 1. 戸田家伝来茶弁当の特色

茶弁当とは屋外で飲食をするための携帯用の飲食器のセットで、現代でいうピクニックセットのようなものです。対の茶箆筥（ちゃだんす）にやかんやお椀などが納まるようになっていて、穴に棒をさし、担いで運びました。

意匠は、いずれも総体が叢梨子地（むらなしじ）に金・銀の平蒔絵（ひらまきえ）で松竹梅を描き、蜂須賀家の家紋である五三桐紋を散らしています。また茶箆筥の上部や爛付、やかんには桐紋唐草模様が、隅にあしらわれた金具には唐草模様が彫られており、丁寧に作られています（図3～5）。



図2：戸田家伝来茶弁当一式（個人蔵・松本市教育委員会寄託）



図3：茶筆筒 上部



図4：やかん 部分



図5：茶筆筒 上部



図6：貝桶



図7：唐櫃

しかしその中で貝桶（図6）と唐櫃（図7）はこれらとは異なり、総体が梨子地に金の平蒔絵で、蜂須賀家の家紋である五三桐紋と左卍紋を散らしています。

ここで家紋に注目してみましょう。婚礼調度には、婚家と実家の家紋を入れることが通例とされています。その例として、時代はやや降りますが第13代将軍家定の継室・天璋院篤姫、および第14代将軍家茂の正室・皇女和宮の婚礼について記した史料があります。それらの史料には、いずれ

も幕府が待請道具の蒔絵調度を用意し、そこには嫁ぎ先である将軍家と実家の両紋を付けることを意味する「両御紋」の表記があります。

茶弁当一式には蜂須賀家の家紋のみが入っていることから、これらが姫の実家である蜂須賀家において用意された調度類である可能性を示しています。

また、貝桶と唐櫃には両家の家紋が表されていることから、これらは嫁ぎ先である戸田家が用意した可能性が指摘されます。

## 2. 茶弁当に用いられている蒔絵の技法

### 平蒔絵（ひらまきえ）

漆工の加飾技法の一つです。漆で文様を描き、その漆が乾かないうちに金・銀などの蒔絵粉を蒔きつけ、漆の粘着力で定着させて文様や図柄を表す技法です。一般的に蒔絵と呼ばれているものは、この平蒔絵のことを指します。



図8：朱塗盃

### 梨子地（なしじ）

器の表面に黒漆、もしくは透漆（すきうるし）を塗り、薄くのばした金粉（梨子地粉）を蒔き詰め、透漆で塗りこむ技法です。梨の実の肌に見えることから、この名前がついたとされます。



図9：貝桶 部分

### 叢梨子地（むらなしじ）

梨子地の一種で、梨子地粉をむらに蒔いて斑状の模様を表したもの。斑梨子地（まだらなしじ）、雲梨子地（くもなしじ）、玉梨子地（たまなしじ）といった呼び方もあります。



図10：三重組重箱 蓋表

### 蒔き暈し（まきぼかし）

漆で地塗りし、金・銀の蒔絵粉を濃淡をつけてぼかすように蒔く技法です。



図11：茶筆筒 部分

## 3. 婚礼調度の格式

次に、器物に塗られた地蒔の種類について注目してみましょう。江戸中期以降、身分階級によって婚礼調度の仕様や数量などが厳しく統制されるようになりました。1901年に完成した旧紀州藩の歴史書『南紀徳川史』によると、紀州徳川家では、地蒔は「黒地」「(村) 梨子地」「濃梨子地」

の順に格式があがるとされていました。

茶弁当一式の地蒔は梨子地と叢梨子地であり、濃梨子地の次に高位であることがわかります。江戸後期、情勢が急激に変化すると将軍家や諸藩の大名は財政が苦しくなり、次第に婚礼調度の地蒔は黒地のものが多くなりますが、蜂須賀家は25万7千石の国持大名であったため、このような豪華な調度を用意することができたと考えられます。

茶弁当一式の他に、制作年の下限が分かっている江戸後期の現存作例で叢梨子地の婚礼調度として知られるのは、天保12年(1841)に一橋徳川家第7代慶寿に嫁いだ伏見宮貞敬親王の息女・徳信院のものと、将軍家では天璋院篤姫と和宮の婚礼調度があります。篤姫は安政3年(1856)、和宮は文久2年(1862)に嫁いでいます。茶弁当の制作下限を享和元年(1801)と考えると、これらとはいずれも40～60年ほどの開きがありますが、御三卿や将軍家の調度に比肩するものとして考えてもよいでしょう。

## 第2章

### 戸田家伝来茶弁当一式に関わる人物

#### 1. 所有者の女性

前述のとおり、蜂須賀家から戸田家には2人の姫が嫁いでおり、該当する女性として以下の2名があげられます。

##### 1-1. 寿美姫

徳島藩第10代藩主・蜂須賀重喜の第7女で、安永7年(1778)11月17日に生まれました。24歳の時、松本藩戸田家第

7代藩主・戸田光年のもとに嫁ぎます。享和元年(1801)4月24日に寿美姫が阿波から江戸に発ち、5月16日に名代が立って幕府に報告を行い、7月19日に呉服橋内にあった戸田家の屋敷に輿入れがありました。跡継ぎの男子に恵まれず、文政8年(1825)に48歳で亡くなりました。

##### 1-2. 光姫

徳島藩第11代藩主・治昭の娘で、寿美姫の姪にあたります。文化6年(1809)9月11日に生まれ、天保元年(1830)に戸田光領に嫁ぎました。

光領は光年の四男で、後に第8代藩主となる光庸の養子です。

婚礼は天保元年4月22日に名代がたつて幕府に報告を行い、9月13日に光姫が阿波から江戸に発ち、11月13日に呉服橋の屋敷に輿入れがありました。没年の詳細は不明ですが、戸田家廟園(松本市史跡)にある墓碑文によると、「慶応元年乙丑五月二十四日卒」とあるため、1865年5月24日に55歳で亡くなったと考えられます。

#### 2. 寿美姫の夫 戸田光年

寿美姫の夫である戸田光年は、松本藩戸田家第7代藩主です。天明元年(1781)4月25日、松本で生まれました。享和元年(1801)20歳の時に江戸で寿美姫と婚礼をあげます。文政8年(1825)44歳の時には戸田家初代藩主・康長の在封年数を換算しての治封百年祭と、第二期初代藩主・光滋の入封後100年を記念しての戸田仁政百年祭を催しました。しかしこの年は天候不順で米価が高騰し、百姓一揆がおこります。光年の在任中は財政状況が悪く、多

難な治世でした。一方、書画に優れた人物でもあったそうで、天保2年（1831）には松本神社に自らの筆で描いた絵馬を奉納しています。歴代藩主の中では特に馬の図をよくし、百馬図などの作品を遺しました。光年は天保8年（1837）56歳で松本にて没しました。

### 3. 寿美姫の父 蜂須賀重喜

徳島藩第10代藩主・重喜は宝暦4年（1754）、秋田藩の支藩から蜂須賀家へと迎えられた養子藩主です。藩主の座に就いた重喜は藩政を改善するため様々な政策を打ち出しますが、家老らの反発にあい、明和6年（1769）に幕府から強制隠居を命じられます。その後32年間の謹慎生活を送り、63歳で亡くなりました。重喜は多少強引ともとれる革新的な改革をしたリーダーでしたが、芸術や学問に対して関心を持った人物でもありました。蒔絵師・飯塚桃葉や密陀絵で有名な絵師を抱え、学問を奨励するために朱子学者を召し抱えています。自身も公家に入門して有職故実を学びました。

## 第3章 婚礼道具の制作

婚礼調度には化粧道具・文房具・遊戯具・武具・飲食具・運搬具のほか衣装、屏風といったものも含まれ、膨大な数に及びます。大量の豪華な婚礼調度を納期や仕様を間違えることなく仕上げるには、大勢の工人達を統率して制作する必要がありました。室町時代から江戸時代まで蒔絵師の頂点に君臨した幸阿弥家を例に見ながら、茶弁当一

式の作者について考えてみたいと思います。

### 1. 幸阿弥家（こうあみけ）

幸阿弥家は足利将軍家以来、織田信長・豊臣秀吉・徳川将軍家の権門に仕えた蒔絵師の家系です。幕末まで天皇の即位の道具は幸阿弥家が代々制作することが通例とされ、徳川将軍家・公家・諸大名の婚礼調度を制作しました。

中でも10代・長重が一門を率いて3代将軍家光の長女、千代姫の婚礼のために制作した初音の調度（愛知・徳川美術館蔵）は、あらゆる蒔絵技術を駆使して制作された、現存する最も豪華絢爛な調度です。総計70件が現存しており、一括で国宝に指定されています。『幸阿弥家伝書』によると、千代姫が生まれた寛永14年（1637）に注文があり、3年近くの歳月をかけて制作したとあります。このように、婚礼調度の制作は点数が多いため工房全体で取りかかる必要があり、また制作期間も長期にわたりました。

### 2. 徳島藩御用蒔絵師 飯塚桃葉

飯塚桃葉は江戸中期に江戸で活躍した徳島藩主・蜂須賀家の御用蒔絵師です。三代にわたって蜂須賀家に仕えました。初代桃葉は印籠の名工で、『装剣奇賞』（天明元年刊）印籠工名譜に「桃葉斎」として採録されています。

初代桃葉の子、2代桃葉が文政2年（1819）に作成した飯塚家の記録『成立書并系図共』によると、徳島藩第10代藩主・蜂須賀重喜に宝暦14年（1764）5月に召し抱えられ、桃葉の名と観松斎知足の細工銘を与えられています。

### 3. 2代桃葉の事績と婚礼調度の制作

2代桃葉は初代の実子で、初代の存命中は桃枝と名乗りました。父が亡くなった年である寛政2年(1790)の12月に家督を相続し、翌年の5月には印籠を完成させて上納し、観松齋知足の銘を使うことを許されました。2ヶ月後に通称を桃枝から桃葉に改めています。この事から、初代が得意とした印籠製作を2代桃葉も引き継ぎ手がけたことがわかります。現存する「桃葉」ないし「観松齋」銘の印籠を観察すると、銘の書体と花押の違いから初代と2代の作例が含まれている可能性が考えられます。

『成立書并系図共』には、「享和元年(1801)4月に寿美姫御婚礼の御用によって褒美を拝領した」とあります。この御用の内容は詳述されませんが、おそらく婚礼調度の制作と思われ、「戸田家伝来茶弁当一式」は、この婚礼調度の一部にあたると思われる。

#### おわりに

松本市教育委員会が保管する「戸田家伝来茶弁当一式」の蒔絵技法やそれらに関わる人物について紹介し、また制作工房につ

いて若干の可能性を指摘しました。

婚礼調度は持ち主が亡くなると、家臣や側付の女中など世話になった者に下賜されたり、寺院へ奉納されたり、売却される等によって散退するため、当初の揃いの姿で残ることはありません。誰の調度であったのか、ともすれば、元々は婚礼調度であったことすら忘れられているものもあります。

しかしながら「戸田家伝来茶弁当一式」は飲食器を中心とした調度群がまとまって現存しており、保存状態も良好で、文献史料から制作年の下限や、所有者をある程度しぼることができます。技法的にみても江戸時代後期の作ではありますが、大名の婚礼調度としては華やかで上品な雰囲気です。また叢梨子地の調度は前述した御三卿や徳川家のものがありますが、女乗物や茶弁当は管見の限り他に現存例がありません。以上のことから、「戸田家伝来茶弁当一式」は歴史的にみて大変貴重な資料といえるでしょう。(北澤瑞希)

#### 参考文献

- ・徳島県史編さん委員会「徳島県史料第一巻-阿淡年表秘録-」(徳島県 1964年)
- ・大橋俊雄「飯塚桃葉関係史料-飯塚家の成立書を中心に-」(『漆工史』漆工史学会 第15号 1992年)
- ・拙稿「資料紹介 戸田家伝来茶弁当一式について」(『長野市立博物館紀要』長野市立博物館 人文系第23号 2022年)

## 博物館だより 第123号 発行日2022年9月30日

長野市立博物館  
〒381-2212 長野市小島町1414  
TEL:026(284)9011  
<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

鬼無里ふるさと資料館  
〒381-4301 長野市鬼無里1659  
TEL:026(256)3270

戸隠地質化石博物館  
〒381-4104 長野市戸隠栃原3400  
TEL:026(252)2228

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館  
〒381-2404 長野市信州新町上条88-3  
TEL:026(262)3500